

## 緊急研究会

### 「東日本大震災の被害状況と復興の方向性を語り合う」

特定非営利活動法人 リ・らいふ研究会 主催

4月9日（土）午後1時～4時45分

エスティック情報ビル 旭化成ファミリーホールにて開催

## 報告および討論の概要

（本稿は4月12日段階の速報／未定稿であることに十分ご注意ください）



本緊急研究会には160名を超える方々が参加してくださり、報告と討論が熱心に行なわれました。状況や今後への問題意識の共有がはかられたと思います。報告者ならびに後援をいただいた旭化成ホームズ（株）、またお世話になった多くの皆さんに厚くお礼申し上げます。

なお当日実費頒布した資料集（40頁）は、リ・らいふのHPから入手できます。

（NPO リ・らいふ事務局 [relife@relife.or.jp](mailto:relife@relife.or.jp) <http://www.relife.or.jp/>）

## (次第 別途に配布資料あり)

開会挨拶 り・らいふ研究会理事長 高見澤邦郎 (首都大学東京名誉教授)

### (第一部 13時～15時)

#### ■被災状況と復興の方向性 (司会：高見澤邦郎)

1. 被災の概況 市古太郎 (首都大学東京)
2. 復興の方向性について (学会での議論も踏まえ) 饗庭伸 (首都大学東京)
3. 「東北」とは？／地域と人の理解なくして復興なし 北原啓司 (弘前大学)

意見交換・・・以上の報告を受けて

### (第二部 15時～16時半)

#### ■東京等の被災状況を踏まえて今後の防災・減災まちづくりを考える (司会：豊川士朗／中野区)

1. 東京区部等の被災状況 市古太郎 (首都大学東京)
2. 参加者が把握している被災状況 (自治体職員等からのコメント)

意見交換・・・以上の報告を受けて

### 開会 (司会／理事・鈴木かおる)

それではこれより特定非営利活動法人「り・らいふ研究会」主催の緊急研究会を始めます。ごく短い周知期間にもかかわらず160名を超える多数の皆様に参加いただき、感謝いたします。では最初に本研究会理事長の高見澤邦郎よりご挨拶申し上げます。

### 挨拶 (高見澤邦郎)

(配布資料に記載の通りであるので本要録では省略。なお、「今次の震災においては、地震・津波・原発事故という三つの被害が重なり、その様相も地域地域で多様なことを踏まえつつも、現在進行形である原発問題に今日は直接の言及をするには至りえない」との発言があったことを記しておく)

### 第一部開始 (進行／高見澤邦郎)

では早速三人の方々から報告をお願いする。最初に被災の概要について市古太郎さん(首都大)から、次いで学会等における対応の状況なども踏まえて饗庭伸さん(首都大)から、最後に「東北とは？」の視点から復興への<考え方>を北原啓司さん(弘前大)から、各々20分ずつほど、話していただきましょう。

#### ■被災の概況について (市古太郎)

被災関連データについては配布資料をご覧いただきたい。(ここでは説明の記載を省略)

私自身、茨城までしか行っていませんので、お見せできるスライドも僅かな地域に過ぎない。ご覧いただいて想像力を働かせてもらいたいと思います。

- ・資料の中にある火災発生データについてはあまり注目されていないが、いずれ分析されるべきと考えている。建物被害もまだフォローされきっていないことに注意してほしい。
- ・やはり、まず、なぜ3万人近い方が命を落とさなければならなかったのかを思う。「想定外」と言われるが、亡くなった方にとって「想定外」という言葉は易々と受け入れられるものではないだろう。被害をみんなが共有することからしか出発できないだろうというのが、私の今震災を考える上での原点である。また、津波が来たということを前に、自分がその場にいたらどう対応したか、できたか、を考えることも大事なところと思う。
- ・津波の災害波がどんな形で(波の高さ、浸水高、遡上高などいろんなとらえ方がある)、どんな時間経過で(数波が、いつ)来たかについてなどをよく理解して、防潮堤の役割等を再度検討することも必要だろう。

- ・文献の一例を紹介しておこう。津波に対してどのように建築物が破壊されるかについては、東北大学の首藤先生の表が出発点になり、越村先生が計算式をつくられている。それらによれば、木造家屋は浸水深さ 2m で全面的に壊れ、今回の最高高さ 18m となると RC 建物でさえも倒壊となる。つまり浸水深さ 2m あたりが大きな被害発生が生ずる閾値となろう。

(以下、茨城県下を中心としたスライドを映写しての報告があったが、本要録では省略する。沿岸の中小工場を津波が襲いそこからの流出物が後背住宅地に被害を与えたこと、漁港の被害とその後背地の被災状況、液状化被害の様相等の解説がなされた)

- ・資料の 3 頁に収録のスマトラ島復興での住宅再建支援などについては、後のディスカッションで紹介したい。(拍手)

### ■復興の方向性をめぐってー建築学会などの対応を踏まえてー (饗庭伸)

- ・建築学会では地震前から広域巨大災害に備える特別委員会(中林委員長)を立ち上げていました。そこで考えていた規模をはるかに超える震災だったが、すぐに本部も立ち上がり、7学会、建築関係士会協会との連携体制も一応はできた。4月6日に最初の報告会が学会ホール一杯の参加者で行われ、JSTREAMでの中継も2千人ほどが見たようだ。建物被害についてはかなりのことが分かってきているがまだまだ未調査の部分もあるし、津波被害の分析はこれからと言えよう。
- ・また、「提言」も検討しているが、政治状況も以前とは変わっています。基礎自治体の多くが大きな被災を受けたが(役所機能の維持も困難)、幸いに県庁は機能維持の状況。中央官僚は動くのに躊躇もあると聞く。阪神・淡路よりも2ヶ月後の日付での地震発生からして、年度末・年度始めへの時間はずっと短い。復興構想会議がスタートし復興庁の話題もあるが、阪神・淡路のように国が方針を降ろしていくとはいかないのではないか。
- ・当面は被災した方々の日々の暮らしや避難場所・移転場所を確保することが急務だが、2ヶ月くらい経ち、さて次の段階を、となってくるとすれば、復興のあり方を様々に議論することも学会等にとって急がれると思っている。
- ・資料集にあるように、6点ほど、「今考えなくてはならないこと」を挙げたい。これは6日の佐藤滋建築学会長の「会長談話」とも共通すると考えている(学会は「提言」等を出そうとすると理事会決定等の手続きがあるので、とりあえずこんなかたちの発信となった)。まず第一には、避難期における地域単位の維持である。ばらばらになるといざ復興となったときに、地域が崩れてしまうから。第二には、仮設住宅、仮設都市施設の計画と運営の必要性だ。阪神・淡路の教訓や中越の知見を役立てたい。しかし、現実には仮設を被災地との関係をつけながら建てることは、土地がなく困難性も高い。いろいろな方法で対応してもらいたい。三点目に、人材不足への対応が必要である。ただでさえ都市計画関係の人がいない市町村で復興を誰が提起し担うのか。人材支援の方法も考えなければならない。
- ・四点目に、強力でしなやかなイニシアティブ、すなわち、「国はしっかり」と言う意味で強力に、しかし自治体の力が発揮されるようにしなやかな進め方を取ってほしい。五点目、六点目はこれからの復興にかかわるが、土地の境界や所有の問題から始まり、どんな復興像を描き、選ぶかの問題。個人的には、大きな防潮堤をつくって…、ではなくて、いろいろな方法、防潮堤も防潮林も、安全性の高い避難施設とか、高台への移転とか、いろいろな方法を場所場所で組み合わせ、選択し、総合的に安全性を高めると言うことではないかと思う。土木学会と建築学会の考え方を総合することも必要そうだ。最後に国土計画の問題があろう。これはまだ「考えねば」のレベルとして挙げるのみだが、避けることのできない大テーマだろう。21世紀の日本のあり方そのものだ。
- ・国交省でも典型的な被災状況を示してそれへの対応にはこんな方向もあろう、といった検討を進めてはいるようだ。今はいろんな案のどれがいい、どれが悪い以前に、たくさんの方の考え方を出すべき時期と思う。もちろん、以上のような「考えるべきこと」を数えることはできても、いざ考え出すといろんなジレンマに直面する。そのあたりはレジュメに4つほど書いたが、あとの討論での話題とする。私の報告はこのへんで終わります。

(拍手)

## ■「東北」とは？／地域と人の理解なくして復興なし（北原啓司）

- ・このタイトルに関してすべてを語るのは難しい。ここでは 20 分という与えられた時間の中で、被害とその復興そのものではなく（それらは今後、多くの組織から、また被災地を訪れた多くの方々から語られよう）都市計画を「今から東北を舞台に」考えていく、またそれを東京に、全国に広げていく、それを前提に、「そのときのスタンス」についてお話してみたい。
- ・3月28日に、「東北という地域の特性や地域地域の差を知らずして復興が語られることを恐れる」と高見澤先生からメールがあった。まさにぼくもそう感じていた。おなじ東北でもまちのつくり、産業の構成、人の気持ち、みんな違いがあるのです。阪神・淡路では真野が、六甲道が、御蔵が、それぞれの復興像を掲げプランナーがはりついて復興へ進んだ。しかしこんどの被災地はとてつもなく広い。その広い沢山のまち・集落に個別解があろう。その広い地域にプランナーがはりつけるかと思うと無力感が生じるが、でもそれであきらめてはいけない。都市計画で何ができるかを執拗に考えていく、そのことに集中しなければならないと思う。
- ・被災後間もなく、たけしの言葉が紹介されていました。正確ではないが「何万人の人が亡くなったのではなく、大事な一人の人が何万人も亡くなったのだ」と。この発想は、私たちが上からの目線で見ずに、一つ一つのまち、地域地域が被災して全体の被災があるのだと見るべき、ということを明確に示している。
- ・私は東北大で学んだが関西で生まれ、今、仙台空港のあるあたりで育った（そこまで津波が来たのだ）。そしてその後津軽に来ました。三陸も殆どのまちを歩いた。宮古と釜石、港町ブルースなら一緒だが、こんなこと言うと差し障りもあるが各々のまちは決して仲がいいわけではありません。漁港として張り合っているから。先年の市町村合併もうまくいかないところが多かった。また沢山のニュースがあるのだが、例えば八戸の先、海猫で有名な蕪島も相当の被害を受けているが、報道されていない。個別に見ていったとき一からやらなければいけないことが山ほどある。
- ・我々は個別を拾い、対応すべきだ。一般解はなく、特殊解の積み上げだ。特殊解は実は一般解に通ずる。普遍解は特殊解の積み上げだと、以前、山本理顕さんに言われたことがあるがその通りだと思います。今こそ、どんどん特殊解を見つけて100年、200年後に一般解をつくっていく、それしかない。
- ・私は弘前に行って、弘前大学でも教えた美術家の村上善男先生にとっても大きな影響を受けた。盛岡出身の彼は若い頃岡本太郎に惚れ込み、訪ねた。そうしたら「東北で闘え。地域で闘えずして東京で、パリで闘えるはずもない」と一蹴された。村上先生はその後中央には一度も出られませんでした。地域というものこそ、その固有性こそ最も大事なのではないだろうか。東京に行くと東北人は東北弁を隠そうとする。残念ながら関西人と違う。また、仙台は東北の顔だが、仙台だけ見ているとその後ろにある沢山の地域を忘れる。
- ・では東北の沢山の地域は遅れているのでしょうか。実際には決して遅れていない多くの営みがある。佐藤滋会長の談話や、先の饗庭さんの「考えなければならないこと」を復興の中で実践することは、まさに日本の都市計画の21世紀を拓くものだが、それに通ずる営みが既にあるのです。サステナブルな都市づくりという21世紀のテーマが復興の中で考えられるべきだ。そして宮澤賢治のことも思い起こして欲しい。
- ・村上善男さんの展覧会が岡本太郎美術館で開かれたとき、三田晴夫さんは「標準時に気を取られ過ぎると往々にして固有時を忘れ美術家としての成果を失いかねないだろう」と書いた。これは「東北で闘え」を信条に東北から世界へ出た村上先生に相応しい言葉だ。時間というものは地域で動いているのです。のろくても固有時をまちづくりで大事にしていきたい。固有時から標準時に働きかける都市計画、そして、農林漁業と都市の関係を再構築すること。それを思う。どう復興するかでなく、21世紀に残る都市をつくるとの想いで臨みたい。
- ・長く弘前でエフエム「まち育てないと」という夜の1時間番組を学生とやってきた。沢山のまちを訪ねて番組に取り上げてきた。驚くべきことにそれぞれのまちがプログラムを持つ時代になってきています。ひと昔前は仙台に、東京に追いつきたいとの思いだったが、最近は、合併も契機になって、ひとつひとつの地域が「固有時」ととても敏感になった。地震の翌日に放送予定だった（もちろん取りやめたが）東松島、石巻はとてつもない被害を受けた。大船渡の卒業生からは「震災が収まった後、高台から見える海が憎い、美しすぎる海が悔しい」との

メールが来た。番組で大事にしてきたまちのストックが失われた。どうしたらいいのか。しかし漁業というストックの痕跡はあります。建物やまちというストックは失われても、産業にせよ暮らしにせよ、その痕跡はあるのだから、それを想い見だし、残し生かす提案が必要だ。新しいまちにせよ別のまちにせよ、ストックを、目に見えないものでも残し生かすようにすべきです。それにも役立てようと学生ともう一度資料を見ながら、このまちはこんなだった、こんなに活かすものがある、と話しながら敢えて番組を続けている。

- ・新しいまちを、昔の都市計画の教科書を使ってつくるような愚は犯したくない。空間をつくるだけではまちをつくったことにならない。「空間（スペース）」を「場所（プレース）」に高めなければいけない。空間はからっぽだが、そこに人々の様々な想いとアクティビティが投入されることで場所が変わるのです。東北で中心市街地を見ているうちに、空間から場所への転換こそが大事だと気がついた。復興でも「空間から場所へ」が大事だし、復興の前段の仮設市街地でも、空間を場所にしなければならない。
- ・産業の再構築のこともレジュメに挙げました。漁港も田んぼも、地域の生業の復活は5年10年勝負ではないだろう。100年先にコシヒカリができるのかに想いを致すべきだ。霞ヶ関でなく、地域の固有時間で考えるべきだ。他方、（新幹線のような）東京からの縦の動線でなく、海側から山側へと、県の違いを超えた東西の交通、横のつながり・流通を考えるのも大事だ。新しいネットワーク、構造を考えていこう。都市と農村漁村の連携とか近隣市町村の連携とかを真のコンパクトシティの文脈で考えていこう。今回の災害からの復興は国土のあり方の再検討でもあるのです。東北を何とかするだけでなく、都市計画を本当にどうしたらいいのか、それを東北から考えたい、そんな気持ちで今から臨みたいと思います。ありがとうございました。

（拍手）

## ■ 討論

（高見澤）

お三方、ありがとうございました。以後討論に入りたいと思いますが、会場にお見えの方を（突然に）指名するかたちで恐縮ですが、短いコメントをお願いいたします。代表して関西からのお二人、まず京都大学の土井勉さん、そして立命館大学の乾亨さん、よろしく。

（土井勉／京都大学大学院工学研究科・医学研究科 安寧の都市ユニット）

- ・阪神・淡路の時は阪急電鉄において、今は土木・交通計画・まちのアメニティを勉強している者です。3人の先生方にお礼申し上げた上で、二三挙げさせていただきます。①まちの再構築と並んで働く場の再生が重要だが、それをどうするかが同時に大事だ。②それも含めてお話のように多様なまちがあり、一つの絵では収まるまい。でももうそろそろ絵も描かねばともあった、しかし固有解が大事だという中で急いでどんなイメージの絵を描くのかと考えればいいのか。③また人材不足にどう対処できるか、専門家が入るだけでなく被災されている方々を巻き込んで、地域の力を高めていくことが大事だと思うがいかがか。以上3点です。

（乾亨／立命館大学産業社会学部）

- ・阪神・淡路の時には真野にどっぷりで全体は見えていなかった。関西にいて、どうしたらいいのだろうか、今はどうにも分かりません。今度の災害の対象はまったくと言っていいほど違う。阪神はまだら模様の被災だったし大阪も健在だったから、周りが被災地を支えることができた。ただ、軸足については同じこともある。①一つには、地域に根ざした安心感が得られなければいけないということ。移動するにしても知り合いと行けば安心だね、ということ。②次いで千葉大の廣井さんの言のように、被災地被災者を支援される人たち、助けられる人たちにしてはいけないということ。立ち上がる力を持ってもらいたい。③さらには地域の力、コミュニティの力を引き出して復興を考えてもらいたいこと。上からの計画の限界性はあるにせよ、上から、下からの関係をどう考えればいいのか、悩むところです（饗庭さんのジレンマと同じだろうが）。

- ・いずれにしても悩みへの答えは地域の中から学び取らなければなるまい。北原さんの言うように、一つ一つのまち、一人一人からの発信を大事にする気持ちを「東北で闘う」と表現されたことに勇気を与えられた。同時にそのような発信にどう我々が手伝い添えるのか。京都から神戸に添うのも容易ではなかった。今回関西は後方支援が中心だろう。学生たちも何かしたいがどうしたらいいのか分からない。東京、そして関西、どうつながっていくか、例えば「学生さん子どもたちと遊んでくれ」という要請があればみんな行くだらう。そんな素朴な気持ちでいます。

(高見澤)

- ・お二人から論点や感想をコメントしていただきました。予定の3時も目前ですが、コメントも受けて、では、ジレンマに関わって「絵とは何でその意味は」あたりを饗庭さんからふれてもらって、北原さんが受け、支援体制など POSMAS にも関連して市古さんに、そして最後に北原さんにもう一度一言いただく、といったところで進めましょう。

(饗庭)

- ・絵を出すことには格好良く言うと戦略的な面と、他方、その中味の面があると思います。建築学会で12日から22日まで開く「まちづくり展」では学生にできるだけ沢山の絵を描いてもらおうと考えています。またA4一枚の提案(できるだけ絵を入れて)も別途求めています。これを求めている意味は、誤解を招くといけませんが、「数多く」というところにある。国等への提言も大事ですが、「これだけの専門家がやる気になってるんですよ」との意気込みを国にも社会にもど〜んと発信したい。「これからの復興は多様にやってください、これだけの専門家がいてこんなにいろいろな提案をしているんですよ」との理解を社会から得たい。また国の計画制度では解けない地域もあるだろうから、あたらしい方法論も必要ですよとの発信もしたい。
- ・ジレンマ。絵の内容として地域がみんなで決める型(まちづくり型)と、理想の市街地像の型(強力型)が両端にありそうなこと。そして、上からのか下からのか。上から適切に降ろして下がうまく使う場合と、下から発想して上が仕組みを整備する場合と、テーマによって違いそうだ。

(北原)

- ・絵を描く話ですが、役所の人々が求めているような「早く絵を」ということではなく、こういう切り口でまちを…、との絵が大事ではないか。それが地域の人たちの考えるよすがとなるように。乾さんの言う地域の人たちの力を引き出す絵。地域の人たちが目標像として考えるための絵。都市計画の完成型としての絵ではない。空間を場所にするために参考となる絵が必要。多様な物語がつむげる絵。これらは上からの目線では無理である。
- ・他方、東北をどう再構成するか絵も必要である。さっき話したような、東西の、横の交通・流通ネットワークは大きな立場で描かなくてはならない。つまり両方の目線が必要と言うことである。ただどの場合でも「空間を場所にする」という筋道は忘れてはいけない。
- ・生業の話は最も難しい。産業がなかったらまちの構築はないのだが、正直、今すぐの方策はぼくの中ではまだ答が出ていない。5年10年のスパンではないと思う。数日前に女子卒業生から「大船渡市役所に採用され、経験を買われて災害FMの仕事に就いた」との電話があった。このように、戻って働く、覚悟を持って働く人たちをどう迎えるかということも、今までの産業という場面以外でも、その地域地域で考え、育てていくことが大事ではないか。農林漁業を今すぐこれまでのようには容易でない。子ども孫の時代に農林漁業が多分今とは違う形となると思うが、復活するためにも、まず、多様な働く場をどう確保するか。それがとりあえず私の考えなければいけないこととと思っている。

(市古)

- ・絵とともにプログラムが大事だ。その地域地域に即したプログラムを考えるべきだろう。宮城県は近々復興方針を発表するとのこと。他の県もそのようにするだろう。その際に、土木インフラと集落復興との関係をどう付けるか。山古志でもどうしても土木インフラが「復旧」の名の元に先行した。ちょっと状況は違うが関係している鞆の浦でも、土木インフラ優先の力を反対運動の中で強く感じた。
- ・資料に挙げたインドネシアのPOKMASを説明する時間はないが、世帯への助成ではなく、住宅再建近隣組合への助成を行って、その使い方を組合に任せたことが特筆される。いずれにしても復興協議会のような組織の大事さと、その中に今避難所でがんばっているリーダーのような人に、「もう一肌ぬいでください。いいまちをつくるために」と入ってもらいたいと思う。また、時限的市街地の発想も一つの絵として考えていくべきと考えている。

(饗庭)

- ・実際の支援の入り方については今後だが、士会とか家協会とかとも協力して学会のできることを考えていきたい。いずれにしても長期滞在が不可欠だろう。若い力も入れるようにしたい。

(北原)

- ・最後に高見澤先生から求められたので、一言。東北に都市計画の専門家はそんなにいない。しかし東北の大学が担っている様々な分野、福祉も食物も産業も教育も芸術も……と広げて考えれば量も質もたいしたものだから、それらの先生や学生の力に期待している。彼らが被災地の復興にかかわり、それに「ちょっと絵を描いてみると…」 「こんな方法もあるよ…」 と支援する都市計画などの専門家が協力する、そんなコラボができるのではないかと考えているところだ。横に広がりつながらないと長期戦には耐えられないと思います。

(高見澤)

限られた時間の中でのとは言え、大切な話を沢山出していただけました。これらも参考にしながら来週以降の学会や協会での議論が進み、やがては長期戦となる被災地復興の実現につながることを期待いたします。3人の先生方にはまことに有り難うございました。

(大きな拍手)

(司会／鈴木)

ではこれで第一部を終わり、10分後の3時20分に再開いたします。

.....

(司会／鈴木)

これより第二部を始めます。司会進行はり・らいふ会員、豊川士朗（中野区役所都市計画課）が務めます。

## 第二部開始（進行／豊川士朗）

第二部は東京等の被害状況を確認するとともに、今後の防災・減災まちづくりにもふれていきたいと思えます。私も震災時に中野区庁舎にいました。低層階のせいあまり揺れなかったし、区内の被害は殆どなかったが、被害の見られた区もある。最初に第一部から引き続いて市古太郎さんから、被災概況を報告していただきます。

### ■東京区部等の被災状況（市古太郎）

- ・資料編 10 頁をご覧ください。建築学会の災害委員会が 3 月中に収集（ヒアリングを含む／各区担当者にはお世話になりました）して公表した資料です。9 区 6 市で応急危険度判定が実施され、危険 59 件、要注意 137 件、調査済み・異常なし 252 件となっている。危険件数が多かったのは足立区 23 件だがそれが木密エリア内の建物かは定かではない。次いで多かった墨田区（15 件）で区へのヒアリングをしたところ、木密エリアよりも錦糸町などの古い鉄骨造が多かったとのこと。葛飾区では江戸川右岸で液状化が指摘され、豊島区では応急危険度判定はしなかったが、直後に全域でブロック塀調査をしたという。その他各区でもブロック塀・擁壁・屋根の調査なども行っているが、総じて被害は少なかった。（ここでは説明の記載は省略します）

数値はともかくとして、区役所と民間の協力でこのような調査が行われたこと自体が今後への資料となろう。

(豊川)

このように区部では、あるいは木密エリアでは被害は殆ど見られなかったようだ。東京以外の状況はどうだったか。会場にお見えの千葉市都市部の森田道比呂さん、いかがでしたか（続いていくつかの区・市・県等からお話をうかがいます）。

### ■千葉市の状況（森田道比呂／千葉市都市部）

- ・直後に対策本部を立ち上げ、随時被害状況を公表してきた。応急危険度判定（2,600 件実施）で要注意が 160 件、液状化も一部で起きた。その他ライフラインの被害はかなり生じた。多くは湾岸の美浜区。復旧は下水道以外は割と早かった。埋め立て前の地盤が被害に関係しているようだ。
- ・基礎自治体は縦割りなので、被災住民の生活をトータルに支援するのが容易でないな、というのが庁内の状況を見ての感想です。また、今回は地震の程度からして対応に余裕が持てたが、首都直下等が起きたらこんなものではないだろう。

### ■江戸川区の状況（舟山光雄／都市開発部）

- ・墨田区の話にもあったが、荒川沿いなどで古い鉄骨造の壁が剥がれ落ちる例が見られた。危険度判定も、入ろうとすると、あるいはもし余震がくると屋根瓦やアンテナが落ちるかも、といった「危険」をどう判断するのかといった問題があった。液状化が東京湾に近いところで起き、うち数件はかなり大変そうで調査を進めている。同じ街区でも細砂で埋め立てた宅地で被害が出たようだ。公共施設の天井部材落下も多少ありました。
- ・当日一番問題が生じたのは帰宅困難者。千葉に向かう橋（都県境）まで 3 時間半かけて歩いて、そこで力尽きた様子が見えた。区施設を開放して泊まってもらったが、予定外の施設だったので飲料水の準備などに手間取った。交通が完全に麻痺したときにどうい対策を取るのか、課題だろう。例えば夜中から上りの大渋滞が起きた。これは迎いの車によるものだったのだが、予想していなかった。なお当区は計画停電範囲に入らなかった。

■八王子市の状況（水島綾子／建築課・安達和之／住宅課）

- ・あまり大きな被害はなく、学校等もガラスの破損程度。八王子駅に最大 3 千人くらいの帰宅困難者が出て、数ヶ所の施設を開放し 1,800 人が夜を明かした。
- ・計画停電への苦情や問い合わせは多く、停電は 15 日夕方から始まったがコールセンターに一晩で 2,700 件の問い合わせがあったと聞いている。その他、市営住宅への受け入れなどの活動もしつつある。

（豊川）

さて、東京等での被害はそう大きくなかったが、今あったように被災者の市営住宅への受け入れといった、広域支援の問題が浮上しています。そのあたりについて、まず埼玉県の状態をコメント願いたい。

■埼玉県での被災者支援（古里実／3 月まで埼玉県住宅課・4 月から県住宅供給公社）

- ・県外避難者数も起点側の県から数えた総務省資料と、受け入れ側の県から押さえた警察庁資料があります。後者によると、3 月 30 日現在で埼玉県が 3,196 人、群馬県が 3,200 人、東京都が 1,037 人、神奈川県が 526 人を受け入れている、となっている。
- ・埼玉県として埼玉アリーナでは 2 千人強を受け入れています、その方々への住宅の対応をということで、500 戸余の公営・公社・UR 賃貸を、また民間さんに協力願って 26,000 戸（家賃は払うが仲介料等は無料）を用意した。うち 159 戸について一時募集をしたところ、676 世帯から応募があった。抽選を終わって来週から入居となるが、その属性を見ると県の避難所から応募された方は 80 数件で、殆どは親戚宅に避難された方など。ヒアリングすると、避難所は当面費用負担がないが、公営住宅に入ると家賃はなくても様々な負担がある。それに耐えられる自信がないので応募できないという答えも多かった。親戚や知人の支援とか就労とかの目処があってはじめて応募できるのかもしれない。公営住宅でも仕事の斡旋をすとか、地元自治会に受け入れのお世話を願うとかを、今進めている。
- ・もう一点、災害救助法の仕組みの問題がある。例えば埼玉県の避難所は福島県からの方が多いのだが、福島県からの要請文書には、避難所の支援（避難対応）を願いたい（仮設住宅・応急住宅は除き）、と書かれている。これは、かかった費用等を被災県に対し国が支払うのだが、その項目から仮設住宅・応急住宅が除外されているゆえだろう。埼玉のように、県ならばそれはそれとして自分の判断でできるが、県下の市町村では被災県からの要請がないと自ら動く判断がしにくい。こういった法律上の仕組みの問題もある。さらにこれには法律問題だけでなく、県民に戻ってきて欲しい（あまり長く県外避難をしないで欲しい）、戻って地域社会を維持して欲しい、という気持ちが被災県にあるのかなと推測もしているが。

（豊川）

住宅の支援には自治体のみならず民間の力も大事だと思う。そのへんでどなたか発言がありませんか。

■佐々木龍郎（建築家・「仮住まいの輪」運営人）

- ・全国で 400 万戸の賃貸住宅が余っている。持ち家も加えると 700 万戸。北原さんの言葉を借りれば、空間があつて場所になっていない家がこんなにあるのです。仮住まいの輪では、物件として住まいをとらず、＜個人と個人の関係＞でとらえている。今 100 件弱、受け入れ側の登録があるが、例えば北海道からは「40 代 30 代の夫婦。子どもがいないので 2 階の二部屋などが空いている。犬好きだったら我が家の小型犬と一緒に暮らしませんか。3 ヶ月ほど 3 食無償で提供します。札幌の郊外でショッピングにはちょっと不便ですが」といった呼びかけ。このような暮らしを求める被災者もおられよう。饗庭先生の言われた「しなやかな新しいガバナンス」の一形態ではないか（もちろん、使用貸借の契約の仕方などは専門家も入って綿密につくっている）。
- ・長い目で都市や国土を変えていく上で、計画とか復興とかの空間ももちろん大事だが、もう一つ、国民としての、

市民としての、〈人と人との関係の再構築〉ということもあるのではないか。その一つの方法として「仮住まいの輪」(HPあり)をスタートさせたのでもある(今回の試みは進展具合をみながら、柔軟に修正していきたいと考えている)。またこういった方法の実践には不動産関係の方々の支援が重要だ。都市とか建築とかの専門家も、地域住民との対応はもちろんのこと、不動産関係の方(大家さんも含め)との協力をしていくことが不可欠だろう。

■吉田雅一(不動産鑑定士・災害復興まちづくり支援機構事務局)

- ・不動産業をやっているわけではないが、私の属する不動産鑑定士協会も参加して、弁護士から社労士、あるいは建築士・技術士等まで、14士業19団体で支援機構を数年前に立ち上げた。首都直下も視野に、東京都とも連携して活動をしている。この夏のシンポジウムも今回の震災に関連して行う予定だ。
- ・今やっているのは、東京にある三つの避難所、東京武道館(約300人)、味の素スタジアム(?人)、ビッグサイト(約150人)、そのうちビッグサイトに6~7士業の者たちが日を決めて「相談所」を開設した。例えば南相馬市から避難された方は、「年金と失業保険を同時に受け取れるか」といった相談をされた。まだ生活の問題が大半で、当然ながら復興までは視野に入れられる段階ではない。ビッグサイトも閉じられるので、今後、福島、宮城、岩手へ毎月1回くらい行って、それぞれの県の市町村も含め、横断的な専門家がいる支援機構としてお手伝いできることがあれば……、と働きかけることを計画中です。

(豊川)

「被災地としての東京等」の話から「被災地を支援する東京等」へ話に移ってきた。被災は受けてもそれほどではない地域から大きな被災を受けた地域への支援、という広域的な連携の問題となるのでしょうか。自治体単位では完結しない。今回そのことが実際に行われてきている。

さて、復興を考えると防潮堤を高くして(重装備で)対応する考え方と、軽装備でも安全を確保できるシステムで対応する考え方と、両方がありそうだ。このあたりも意識した発言をお願いしたい。

■石塚昌志(都市再生機構)

- ・宮城県の多賀城市の出身で、やっとの間行ってきました。津波の被害はまさに甚大。今後どういった復興をするのか、とても悩ましい。しっかり議論しないと将来に禍根を残すのではないかと。上からの目線、下からの目線という話があったが、国民の意思をとらえ、具現化するのには政治家や中央官僚の責任だろう。それを自治体・市民の意志・意向とすりあわせていければと思う。

■大竹亮(国土技術政策総合研究所)

- ・つくばの研究所も震度6弱を受けたが、その後いろいろな調査等を進めている。難しいと思うのは、阪神・淡路の時は、今後このような被害が出ないようにする、強い市街地、建築などで、の目標と手段があった。その手段は、もちろん実施に際しては問題も残したが、確立されていた。しかし今回は津波被害を受けて、これまでの知見や手法では十分でない。絵も手法も定見のない中で求めなければならない。安全・安心の「レベル」の議論もこれからだ。
- ・したがって直ちに復興が動き出せるという状況にはないのではないかと思います。検討のためのビジョン・姿・絵、といったものがいよいよ大事だ。できあいの手法が使えないが故に、普段皆さんが実際に町まちで苦労して進めているまちづくりの事例経験からも、学び取るべきものがあるのではないかと。

(豊川)

確かにまちづくりとは事業とだけ考えてはいけない。決して今までの延長線でなくと思う。ここで、現地に入られた方からコメントをお願いします。

■神谷（都市プランナー／マヌ都市建築研究所）

- ・昨日まで陸前高田市に入っていた。そこでは 240 人の職員の三分の一が亡くなった。それでも既に復興、特に産業の復興をどうするかを真剣に考える人たちも出てきている。しかし国の見解だとか、今日の話とかが被災地の行政に全く届いていない。実は被災の少ない一関市にいろんな拠点を置いて陸前高田を支援できないかと考え、一関にも相談した。すると、既にそのような体制を準備しつつある、しかし、高田から SOS が入ってこない、という。災害救助法の構えもあって自治体間をつなぐのが難しい。
- ・そんな状況を考えると、いっそ、まず、思い切って現地に飛び込んで行動するのがいいのではないかと。そして具体的なやりとりをしないと何も進まないのではないと思う。陸前高田の職員も疲労の限度にある。復興の空間の議論は先で、まずは、こちらのプログラムなどのメッセージを早く、きちんと現地に伝え、少しでも安心感を持ってもらうことだ。コミュニティも存亡の危機にある。

（豊川）

今、リ・らいふ研究会のメンバーも数名被災地に入ってます。来週以降、今のような現地情報を踏まえて切迫した議論がいろいろな場で交わされるものと思います。それでは時間も一杯なので、あとお三人だけお願いします。

■秋山哲男（北星学園大学客員教授／日本福祉のまちづくり学会副会長）

- ・属している学会で調査団をつくり被災地に入ります。特に高齢者障がい者の環境状況について調査してきたい。皆さんからも、福祉のまちづくりに関連する意見を学会に寄せて欲しい。また、市街地が崩壊したエリアに、従前のままの精神病院とか障がい者施設とかを再建することがよいのか、の問題も是非考えていただきたい。
- ・もう一つ、「公共交通」の問題を復興の中に入れてほしい。「住民アクセス権」の保障がわが国では著しく遅れている。さまざまな交通手段を活用して、適切な費用負担で、移動の権利が守られるような復興であって欲しいと思っています。道路をつくることのみが交通計画ではないのだ。閣議決定された交通基本法の中でも交通における公益の概念を強調している。コンパクトシティ論とも関係した問題である。

■松枝廣太郎（都市プランナー／松枝建築計画研究所）

- ・今までの災害にあっても、再開発という方法を通じて復興にかかわる仕事をしてきたが、今回の災害からは、それら経験をもう一度根底から考え直す必要があると強く感じた。これまでは被災した場所での再建を前提にしてきたが、冒頭にあったように、3 万人もの人たちがなぜ命を失わなければならなかったのかだ。その悲劇を踏まえれば、今までの都市計画は何をしてきたのかと思わざるを得ない。復興を同じ場所だと性急に考えていいのか、疑問が生ずる。頭を冷やしてもう一度原点から考えていくべきだと震災直後から思っていたので、今日のこの機会を得て、発言する次第です。

■高野公男（東北芸術工科大学名誉教授／マヌ都市建築研究所）

- ・長く防災をやってきたが、これほどの被災を予測した専門家は一人もいなかった。大変残念だし情けなく思っています。今の松枝さんの「何をやってきたのか」との反省の言に全く同感。我々は日本が災害列島であることを忘れてきた。専門家は忘れてなかったとしてもそれを社会に十分にアピールしてこなかった。国土のあり方、地域のあり方、暮らしのあり方を根本的に考え直す必要がある。とともに、たとえば「稲村の火」のストーリーがもっと受け入れられていれば少しでも被害を縮小できたろう。昔からの知恵にも再度注目して欲しいものだ。
- ・当面は被災地の救援活動が中心だろう。自治体域を超えた支援のできる NPO、NGO が育って欲しい。結局災害対応は人と人の結びつき、ヒューマンコンタクト、ヒューマンネットワークが基礎にある。今日集まった皆さんも、お互いのネットワークを構築して、これからの長い道のりを歩んでいかねばなるまい。

(豊川)

短い時間ながら多くの貴重な意見が得られました。これからも様々な場で被災地の支援、復興への支援を続けて参りたいと考えます。

(司会／鈴木)

本日は報告者の皆さん、参加者のみなさん、長時間まことにありがとうございました。

(4時45分 大きな拍手をもって終了)



冒頭にも書きましたが、本報告は4月12日作成の暫定版であり、未定稿であることにご留意ください。いずれ、完成版を作成し、頒布する予定であります。

今後とも特定非営利活動法人「リ・らいふ」へのご支援をよろしくお願いいたします。

(NPO リ・らいふ事務局 [relife@relife.or.jp](mailto:relife@relife.or.jp) <http://www.relife.or.jp/>)